

<p>C1-037 □□□</p>	<p>【特許調査／技術的範囲】</p> <p>次の記述内容は適切か？ 特許発明の技術的範囲は、願書に添付した特許請求の範囲の記載に基づいて定めなければならないため、特許情報検索にあたっては明細書の記載を考慮することなく、特許請求の範囲の文言のみを考慮して検索を実行することが肝要である。</p>	<p>不適切である。特許検索にあたっては、特許請求の範囲の文言のみを考慮した場合には、検索漏れを起こす可能性がある。</p> <p>第10回(特許)問25に関連</p>
<p>C1-038 □□□</p>	<p>【特許調査／フリーワード検索】</p> <p>次の記述内容は適切か？ フリーワード検索を行う場合、一般的には長い語句や長い複合語を用いるとヒット件数が膨大になっていわゆるノイズが増え、短い語句を用いるとヒット件数が少なくなって検索漏れが生じやすい。</p>	<p>不適切である。反対である。短い語句を用いるとヒット件数が膨大になっていわゆるノイズが増え、長い語句や長い複合語を用いるとヒット件数が少なくなって検索漏れが生じやすい。</p> <p>第13回(特許)問10に関連</p>
<p>C1-039 □□□</p>	<p>【特許調査／テキスト検索】</p> <p>テキスト検索の長所としては、単語を入力するだけなので簡単であること、(2)で検索できること、技術用語が(2)な場合は効率よく検索でき、出願人、発明者の検索ができることを挙げることができる。 一方、短所としては、(3)や(4)が多いこと、(5)は検索できないこと、構造、形状等の技術は検索できないこと、(6)等の展開に技術を要することを挙げることができる。</p>	<p>①最新の技術用語 ②特殊 ③ノイズ ④検索漏れ ⑤古い文献 ⑥同義語</p> <p>* テキスト検索では、いわゆる「シソーラス」の問題に注意が必要である。</p> <p>第13回(特許)問10に関連</p>
<p>C1-040 □□□</p>	<p>【特許調査／漏れとノイズ】</p> <p>特許調査における「検索漏れ」とは、調査対象技術と類似している公報等が存在しているにもかかわらず、それを検索で見つけ出す(ヒット)ことができないことをいう。一方、「ノイズ」とは、検索されたもののうち、調査対象技術とは関係のない公報等をいう。 キーワード検索のメリットは、(1)である。一方、(2)、(3)、(4)などの(5)等を用いて検索を行えば、検索漏れやノイズを少なくすることが可能であるが、習熟のためには一定の訓練が必要となる。 キーワード検索を行う場合、同義語や類似語についても検索しないと、(6)が多くなる。一方、キーワードを絞り込み過ぎると、(7)が多くなる。 (5)を用いた検索式を利用する場合、演算子として「AND(*)」を用いれば、検索ヒット数は(8)なる。演算子として「OR(+)」を用いれば、検索ヒット数は(9)なる。ノイズを減らすためには、演算子の(10)や(11)が有効である。検索漏れを少なくするためには、演算子の(12)が有効である。</p>	<p>①簡単 ②IPC ③FI ④Fターム ⑤特許分類 ⑥検索漏れ ⑦ノイズ</p> <p>漏れ・ 労力増大のリスクが存在していることを認識しておく必要がある。</p> <p>* 検索式の品質を確認するために、予めヒットされるべき公報のサンプルを用意し、検索結果と照合して検索漏れが生じる割合を評価したり、検索ヒット件数のうち、ノイズとなる公報の件数・割合を評価することなどが行われている。</p> <p>第9回(特許)問10に関連 第13回(特許)問10に関連</p>